

九州大学 大学文書館ニュース

第49号

2026. 3. 31

目次

絵画の窓からみえるもの — 小野寺直助の肖像	九州大学大学文書館委員会名簿…………… 9
画をめぐって — …………… 2	九州大学大学文書館名簿…………… 9
「吉岡齊資料展 日本の科学技術と原子力政策」	大学文書館日誌抄録…………… 10
開催報告…………… 6	



「高木磯太郎資料」の一部（2025年5月撮影）

九州大学大学文書館が令和7（2025）年5月に購入した「高木磯太郎資料」（全49点）の一部。高木磯太郎（1865年生まれ）は、九州大学医学部の遙か前身にあたる福岡甲種医学校（1883～1888）を明治21（1888）年に卒業し、産婦人科の医師となった人物。資料は、医学校時代の自筆による講義ノートや備忘録等が大半を占め、当時の医学教育を知る上で極めて貴重である。また、私学盞簪学舎（阿蘇宮地）時代のノートも含まれており、学術的価値がある。

本資料の中に、医学校の斎藤武英教諭（外科学）宅に寄宿していた高木磯太郎が、漢文で記した日記「雑記載録」1冊がある。明治18（1885）年1月から7月に至る博多の町の様子や医学校での生活が丹念に綴られている。その中に、医学校の大森治豊（外科学）、池田陽一（産婦人科学）の両教諭によって行われた画期的なポロー式帝王切開手術について、従来知られていなかったことも含めて、興味深い記録が残されている。

「高木磯太郎資料」に関する論考は、本年3月発行の『九州大学大学文書館研究紀要』創刊号に掲載されている。

絵画の窓からみえるもの — 小野寺直助の肖像画をめぐる —

江頭実生

はじめに

九州大学における日本近代洋画への水脈は、美術愛好家としての博士たちの姿に見いだされる。個人的な収集にとどまらず、支援者として画家を支え、そこには大学人による知の循環もあった。

九州大学大学文書館（以下、文書館）は、博士の肖像画を含む約215点の絵画を所蔵し、日本近代洋画史を彩った画家たちの作品が並ぶ。大学史における絵画は、変化する時代のなかを生き、流浪の旅をしてきた。文書館も伊都キャンパスへの移転が決まり、再び旅にでることとなった。移転に向けて所蔵品の確認作業を行うなかで、九州帝国大学医学部第三内科教授・小野寺直助の肖像画の存在を知った。このことを契機として、忘れられた物語へ光をあてることを試みたい。本稿では、文書館が所蔵する小野寺直助の肖像画の来歴を追う。

1. 九州大学と美術の受容

肖像画の日本近代洋画史に触れつつ、九州大学医学部における美術愛好家の起点について概観する。

「美術」が官製用語として成立した明治期、幕末から始まった日本近代洋画は転換期を迎えた。

写真技術が未発達な時代、色彩の再現と保存性に優れた油彩による写実的な肖像画は権力者にとって権威の象徴となった。明治40年に文部省美術展覧会が開設し、展覧会制度の整備によって官展は画家を評価する基準の一つとなった。文書館が所蔵する昭和初期の肖像画には、官展系の画家の作品がみられる。日清戦争後の産業ブルジョアジーの台頭により、洋画家のパトロンが現れて支援が広がった。肖像画は近代化を可視化する装置として像主の理想が描かれた。

一方、九州大学の美術愛好家の淵源は、京都帝国大学福岡医科大学第二外科教授・中山森彦に求められる。中山は美術愛好家・評論家としても知られ、医学部における芸術文化活動の先駆けと考えられる。美術品の品評と研究を行う場として「五月会」を組織し、診療科をこえた博士と画家が交流する美術愛好家のコミュニティが形成された。



小野寺直助 肖像画（題名不詳）



署名部分（拡大）

医学部が発刊する『九大医報』には、絵画や古陶磁などの芸術評論や随想の記事がみられ、趣味を主題とした座談会の記事には芸術・文学・歴史学など、博士たちの多様な知的世界が広がっている。

また医学部では、同じ医局の出身者で構成する親睦・相互扶助・情報交換を主旨とした同門会によって顕彰活動が醸成され、記念事業で画家に肖像画を依頼していた。実業家や政治家が肖像画に権威と理想を求めたのに対し、門下生が依頼者で

ある博士の肖像画は恩師の精神を具象化した敬慕の象徴ではないだろうか。しかし、門下生が去り、記憶と結びつく場所から切り離されると、来歴不明の絵画として忘れ去られる。本稿で扱う小野寺直助の肖像画は、九州大学における美術愛好家の土壌となった医学部の一端を示す資料である。その一方で、継承をされずに作者や制作経緯が判然としない資料でもある。そこで、署名や資料を手がかりに作者同定と来歴の可能性について検討する。

2. 郷土が結ぶ美術の地平線

小野寺の肖像画は、令和元年5月に第三内科（病態制御内科学）から小野寺の胸像とともに移管された。かつては医局に飾られていたが、移管後は絵画と認識されずに長らく保管されていた。資料が乏しく、作者同定の手がかりは画面の左下隅に「Seijiro Sasaki」と筆記体で記された署名のみである。美術愛好家である小野寺の交友関係をたどるなかで、同郷の佐々木精治郎という画家に行き着いた。佐々木の作品と比較すると、赤褐色で記された署名の筆跡が共通した。また、小野寺がフランス留学や個展の開催を支援していたこともわかり、佐々木精治郎の作品である可能性が浮上する。

佐々木は、岩手県黒石村（現・奥州市）の出身で大正から昭和にかけて活動した洋画家である。明治期に機械化農業を学ぶため渡米したが、のちに画家の道へ進み、現地の美術学校で学んだ。帰国後、郷土での活動を経て、フランスへ留学し、サロン・ドートンヌに出品している。パステル画の作品が高い評価を得て、郷土では「パステル画の巨匠」と称されている。

小野寺は郷土の画家や夢を抱く若者たちに積極的な支援を行っており、その根源にはノブレス・オブリージュがあったと思われる。原点と位置付けられるのが、岩手医学専門学校長（現・岩手医科大学）の三田俊次郎と福岡の紙与呉服店の三代目・渡辺與八郎から受けた支援と仁愛の精神である。後年、返済を申し出た際に三田と渡辺は辞退をしている。三田は、返済金を故郷の経済的に恵まれない優秀な若者のために充てるよう小野寺に伝えたとの記述がある。小野寺の支援活動は、二つの郷土にゆかりのある恩人から受け継がれたものであることを示唆している。

小野寺が佐々木と接点をもった経緯は明らかではないが、背景としていくつかの可能性が考えら

れる。小野寺とともに佐々木のフランス留学を支援した三菱の郷古潔は、盛岡中学校（現・盛岡第一高等学校）と第一高等学校（現・東京大学教養部）の同級生であり、卒業後も親交が続いていた。渡仏前、佐々木は小野寺の支援によって写生旅行で福岡を訪れ、そのときに制作した作品は昭和2年5月に盛岡で開催された個展へ出品されている。

小野寺と郷古は佐々木を帰国後も支援し、昭和5年に福岡で開催された「佐々木畫伯滞歐製作品展覽會」、同年に東京で開催された頒布会の発起人を務めた。さらに滞欧展の発起人には、九州帝国大学工学部教授・永積純次郎や盛岡中学校の後輩で岩手洋画壇の中心的存在である五味清吉の名もみられる。五味は小野寺と同じ前沢町（現・奥州市）にゆかりがあり、両者には親交があったことが伝えられている。

一方、佐々木は五味が指導者的立場にあった美術団体・七光社へ参加し、大正9年には同団体の主催で郷土出身の画家として初の個展が開催されて注目を集めた。

このように佐々木をめぐる支援者をたどると、盛岡中学校を起点とする同窓関係が浮かび上がる。同校には各界で活躍した人々が集っており、知の循環によって郷土の洋画家を支援するパトロンネットワークとして機能したとみられる。同窓生が形成したコミュニティが地域における日本近代洋画を涵養する回路の一つとなった可能性がある。また、渡欧後援会・滞欧展・頒布会の発起人には盛岡中学校出身の実業家や福岡の名士が名を連ねていることから、二つの郷土をめぐる人的環境が複合的に作用し、佐々木の支援へとつながったと推測される。

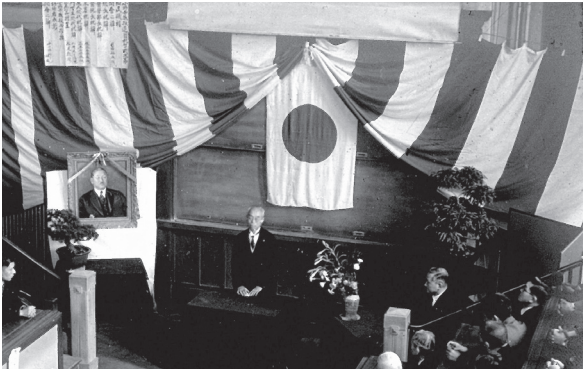
3. 肖像画が語るとき

次に本肖像画を読み解き、来歴の可能性について検討する。

画面の左下隅にある「2602」という数字は、佐々木のほかの作品と共通する点から皇紀の可能性があり、退官する1年前の昭和17年に制作されたものと考えられる。門下生によると、肖像画が掲げられたのは昭和18年の秋で、小野寺が満州国の新京医科大学教授に就任した頃である。

西洋の伝統的な肖像画と同様に四分の三の半身像でキャンヴァスに油彩で描かれている。

表情は威厳がありながらも門下生の記憶と同じ温顔である。黒のジャケットとベストは生地



小野寺教授還暦祝賀会

上質さを感じさせ、左側の腰付近に勲章が描かれている。金銀八条光線と中央に宝鏡・連珠がみられ、昭和12年に授与された勲二等瑞宝章と思われる。服に溶け込むような描き方で権威的な際立たせ方ではなく、黒との対比で静かな存在感を示している。手はふくよかに描かれ、重ねてきた時を陰影で表現している。小野寺は柔和な笑顔が特徴で退官記念論文集の肖像写真も笑みを浮かべており、同郷出身の洋画家・白石隆一が描いた《小野寺直助肖像》も同様である。本肖像画は、穏やかでありながらも凜とした表情である。畏敬の象徴となるため、やや緊張しながら表情をつくっていたとも考えられる。空間に時が薫る柔らかなパステルを想起させる人物描写も共通している。以上の点から、佐々木精治郎の作品であると推測する。

小野寺の肖像画に関する資料はほとんど残されていないため、制作経緯は不明である。

昭和33年の「小野寺名誉教授学士院会員御選任祝賀準備委員会」による寄付金募集の案内状には、戦時下の退官であったため十分な謝意を表せなかったことが記されている。文面からは、退官時に記念品が贈られた可能性はうかがえるが、同門会が退官記念の肖像画を佐々木に依頼したかは明らかではない。

次に肖像画の物語に続くある画家との奇縁について紐解いていく。

登場人物として、小野寺の退官後に第三内科教授となった沢田藤一郎と戦後に熊本の美術界を牽引した海老原喜之助が加わる。沢田は盛岡中学校の出身で、九州帝国大学医学部の学生時代に小野寺が支援を行っていた。退官記念である《沢田藤一郎教授肖像》は、海老原が制作した。はじめは二科会福岡支部長の伊藤研之に依頼したが、親交のあった海老原を薦められた。海老原は鹿児島県出身で、大正末期から昭和にかけて日本とフラン

スで活躍した画家である。パリ留学中に藤田嗣治に師事し、海老原が描く鮮やかな青は「エビハラ・ブルー」と呼ばれ、パリ画壇で高い評価を受けた。独自の造形と色彩による力強く詩情豊かな画風として知られる。

肖像画は沢田が退官する昭和33年に描かれ、医局で小野寺の肖像画と向かい合う場所に掲げられることとなった。しかし海老原が難色を示し、佐々木が描いた肖像画に絵筆を入れた。海老原は手を加えた箇所が目立たないようにガラスを入れることを指示し、沢田教授退職記念会によってはめられた。後に《沢田藤一郎教授肖像》は福岡市美術館に寄贈されている。

小野寺は退官後も医学部を訪れており、海老原が描き加えた肖像画を見ていた可能性も考えられる。しかし、日記等では自身の肖像画について触れられておらず、額縁の向こう側の小野寺に問いかけても沈黙したままである。

作者の佐々木にとっては、キャンヴァスの上で予期せぬ邂逅となったであろうが、世界観が異なる画家たちの表現と二人の博士の物語が融合し、九州大学史において記憶を語る作品の一つとなっている。

4. 美術愛好家としての小野寺直助

美術愛好家としての小野寺の資料は少なく、日記や門下生たちの回想にその断片をみる。

小野寺は中国古陶磁と絵画の収集家であった。古美術鑑賞行脚をともにした門下生の平田覚氏によると、小野寺は独自の視点で美しさを発見する研究心と探究心があり、無意味な権威主義の美は好まなかったようだ。

小野寺のコレクションには、古賀春江や坂本繁二郎ら久留米の画家、藤田嗣治、ロシア未来派のブルリュークなどがみられ、所蔵する絵画の一部は医局に飾られていた。

佐々木の作品も含め、印象的な3点の作品がある。古賀春江の《海》は、第三内科教授として歩んだ時代とともにあり、佐々木が描いた肖像画は、円熟期を迎えながらも新天地へと向かう開拓者を見送った。そして、久留米大学を退職する際に贈られた、坂本繁二郎が深遠なる世界を描いた《能面》へとつながる。

この作品は、昭和43年に福岡県文化会館（現・福岡県立美術館）で開催された「近代日本の洋画史を開いた九州の画家たち」展へ《海》とともに出品されている。二点の作品は、小野寺が歩んだ

人生を象徴している。

同年、日本医師会最高優功賞を受賞し、11月1日に東京で行われた式典へ参列した二日後に帰福し、愛蔵品を鑑賞するために福岡県文化会館を訪れた。会場の中央に置かれた椅子に腰かけ、《能面》を眺めていたが体調の異変に門下生が気づき、帰宅をすすめられた。その日が小野寺と絵画が交わした最後の対話となった。臨床に生きた一人の医師は、文化の日である11月3日に急性心不全により、85年の生涯を静かに閉じた。

小野寺の芸術観について書かれた資料は確認できないが、昭和16年の日本内科学会で会長として述べた閉会の挨拶からその一端がうかがえる。

「深く考えること、よく勉強すること、しかしどこまでも努力し続けることのみでは偉大な発見は出来ないかも知れない。同時に自然に親しみ、愛しその中に時に侵入し、我を忘れんとする境地にさまようことは、真面目な学者としても、インスピレーションと云った様なひらめきに遭遇するためにも必要なことでもある」

この言葉は小野寺と芸術の関係性を表すものではないだろうか。柳宗悦が『蒐集に就て』で述べた「蒐集が創作に入る時、新しい世界が建設される」という言葉にも通じる。

小野寺にとって絵画は、画家が描く世界を遊歩し、作品との対話から独創的な発想が生まれる源泉のような存在であり、心眼でみつめた美と医学は一つの道でつながっていたのかもしれない。

おわりに

手渡されなかった物語は、たやすく時代の海に消えていく。

大学における絵画は時の経過とともに抽象的な資料として扱われ、その存在は顧みられなくなっていく。公の記憶から時が生む新たな真実性の潮流のなかで個の記憶へと変わり、やがて輪郭を失う。歴史は円環的に創造と問いを繰り返す。

小野寺の肖像画は、大学での美術品保管と継承の課題を示すと同時に文書館の可能性も語る存在である。

絵画は人々が紡ぐ記憶を可視化し、その物語を文書資料が大学史の文脈へ還すことによって呼吸しながら他者へと共有される。歴史の守り人である文書館が継承することにより、絵画は窓となって大学史や地域史にもつながる架け橋として、九州大学の普遍的な付加価値となる可能性を感じた。

大学史に瞬く星々は過去の景色を未来へ伝えるとともに、はてしない問いを投げかけている。

小野寺は医史学講座の開設を提言していた。京都帝国大学福岡医科大学の創立者である大森治豊の記念館をつくることを構想し、遺族から遺品を収集して鍵のかかった箱に保管していた。着物や外套、靴、誤ってキセルを飲み込んだ患者から手術を行って取り出した物などが収められていた。しかし、終戦後に満州から帰国するとなくなっており、自家水道のタンクのタワーも撤去され、大森を語る歴史の遺産の一部は姿を消した。その経験から日本の大学で医史学講座が開設される必要性を説いた。これは守り人たちへの問いでもある。

博士たちの物語は次の織手へと託され、受け取った糸を守り人が継承し、歴史の機織りは続いていく。箱崎と馬出が織りなす物語を発祥の地から伝え続けることは、次の地平線である伊都へと繋がっていく。今回ご紹介した作品は一部であり、絵画たちは語り手となれる日を待っている。(作者同定については、めんこい美術館の斎藤恵様にご教授を賜り、心より御礼申し上げます。)

《参考文献》

板垣政参「思い出」『九大医報』第28巻第1号、九州大学医学部躬行会出版部、昭和33年4月。
一般財団法人 奥州市文化振興財団 [編] 『めんこい美術館20周年記念事業 佐々木精治郎展』令和4年1月。
奥州市教育委員会事務局歴史遺産課所蔵<小野寺直助関係資料>「佐々木精治郎畫伯滯歐製作品展覽會開催趣意書」昭和5年。
小野寺龍太『日露戦争時代のある医学徒の日記—小野寺直助が見た明治』弦書房、平成22年7月。
河北新報社盛岡支社 [編] 『いわての芸術家たち人と美』河北新報社、平成3年6月。
「<記念座談会> 沢田先生を囲んで」(昭和42年) 井上幹夫 [編] 『碑 九州大学医学部内科学第三講座教室開講五十周年記念誌』
木下直之『世の途中から隠されていること—近代日本の記憶』晶文社、平成14年。
奥州市牛の博物館『郷土の企画展 胆江の近代画家たち—五味清吉と佐々木精治郎を中心に—』令和4年3月。
「座談会 小野寺名誉教授を囲み医学の今昔を聞く1」小野寺直助ほか(昭和43年) 古山正朔 [編] 『臨牀と研究』第45巻第1号、大同學館出版部。

「座談会 故小野寺直助先生と久留米」遠城寺宗徳ほか（昭和44年）、古山正朔〔編〕「臨牀と研究」第46巻第3号、大道學館出版部。

高山百合〔編〕『九大百年 美術をめぐる物語 1911-2016【図録】』福岡県立美術館・九州大学総合研究博物館、平成28年。

田鍋隆男「中山森彦博士と五月会」（平成28年）後小路雅弘・松久保修平〔編〕『九大百年 美術をめぐる物語 1911-2016【論集】』九州大学総合研究博物館。

二宮八郎（昭和44年）「御逝去当日の先生」『九大

医報』九大医学部同窓会出版部、第38巻第6号。日本洋画商協同組合〔編〕『日本洋画商史』平成6年11月。

平田覚（昭和39年）「思い出すことども」『九大医報』九大医学部同窓会出版部、第33巻第6号。

本平次男『岩手県洋画壇の指導者・五味清吉の生涯』胆南新報社、平成11年10月。

めんこい美術館所蔵「佐々木清治郎畫伯作品頒布會趣意書」

柳宗悦『蒐集に就て』昭和8年4月。

（九州大学大学文書館事務補佐員）

「吉岡斉資料展 日本の科学技術と原子力政策」開催報告

赤司友徳

はじめに

九州大学伊都キャンパス・フジイギャラリーにおいて、2025年6月11日から8月6日までの57日間、「吉岡斉資料展 日本の科学技術と原子力政策」を開催した。あわせて九州大学附属図書館中央図書館の協力により、「吉岡斉資料展関連企画 著作にみる吉岡斉の仕事」（会期：6月11日～30日、会場：3階エントランスホール）を実施した。

展示は、第1部「吉岡斉資料の整理プロジェクト」、第2部「『膨張と忘却』に見る吉岡斉資料」、第3部「九州大学での仕事」、そして「吉岡斉科学技術史文庫」コーナーの4つで構成した。会場に展示した解説パネル、資料等は100点を超え、大学文書館としては異例の規模で実施できた。また、NHK福岡放送局の協力により、「放送文化基金賞 最優秀賞など数々の賞を受賞したETV特集「膨張と忘却 ～理の人が見た原子力政策～」（2024年3月初回放送）に関する紹介コーナーも設けた。

会期中には同番組の再放送があり、また会期末にはオープンキャンパスとも重なった。こうした条件も追い風となり、来場者は1,400名を超えた。加えて、会場内に設置したアンケートには108件の回答があり、来場者の強い関心がうかがえた。

1. 展示の概要

本展示会は、故吉岡斉氏が残した膨大な資料に加え、その整理と目録作成を長年支えてきた卒業

生を中心とする市民ボランティアの存在によって初めて可能になったものである。

当館が所蔵する吉岡斉資料は、図書類約1万2000冊、文書類10万点以上から構成される。これらは、科学技術と社会の関係、とりわけ日本の原子力政策をめぐる議論を、一次資料から読み直すための基盤となりうるだろう。吉岡資料には、研究メモや手稿、講義資料のほか、政府の委員会資料、情報公開請求に関わる文書、出版物の草稿や編集資料などがあり、これらは貴重な一次資料の宝庫である。加えて、それらの資料には少なくない書き込みがなされており、公式な記録だけでは見えにくい判断の過程や、議論の焦点を読み取る手がかりが残されている。

本展では、そうした資料そのものを見せるだけでなく、資料が大学に受け入れられ、整理され、公開へ向かう過程を同時に示すことを重視した。これは、資料を後から使えるように整理して公開する、アーカイブズ（文書館）の仕事とその意義を理解してもらうためであった。

展示は、第2部の原子力政策に関わる資料を中心に構成し、個別の政策論争にとどまらず、戦後の科学技術がどのように社会の制度や価値観と結びつき、時に制御不能な力として膨張してきたのかを、長い時間軸で捉えようとする視点、そして科学の進歩が社会にとって常にプラスとは限らないという吉岡氏の警鐘を、来場者に伝えるよう工夫した。



会場入口



会場内（見学風景）

【第1部：吉岡齊資料の整理プロジェクト】

第1部では、研究者の死後に貴重な資料が散逸してしまう危機と、それを回避するための資料レスキューの実際を、具体的な作業として伝えた。

2018年1月、吉岡齊氏が逝去した。福岡と東京の自宅、横浜の実家、九州大学の研究室など複数の拠点に、長年の活動のなかで集めた書籍・文書が残された。とりわけ福岡の自宅には大量の資料があり、同年2月末までに引き払う必要があった。資料救出は、吉岡氏に近い綾部広則氏（早稲田大学教授）と川野祐二氏（当時下関市立大学、現久留米大学教授）を中心に進められた。2月末、福岡の自宅と研究室から合計363箱（自宅199箱、研究室164箱）を収集した。内容は書籍のほか、研究ノート、書簡、会議資料、写真、録音・録画テープに及び、多数のパソコン本体も含まれていた。資料はまず下関市立大学で一時保管のあと、早稲田大学へ移送された。そこで内容確認と分類が行われ、全点をスキャンしPDF化された。パソコンから抽出したデータも含め、総データ量は約1テラバイトに達した。電子化により、物理的な劣化を防ぎつつ、場所を選ばず複数

の人が同時に作業を進められる体制が整った。

資料の保管から公開までは自動的に進むわけではなく、目録の作成に多くの人手と時間を要する。目録とは、資料を探せるように、内容や作成年月日、作成者、形態などを1点ずつ記録した一覧である。吉岡資料の場合、寄贈の段階でPDF化が済んでいたため、袋詰めや番号付けなどの物理作業を一定程度省き、内容の読み取りとデータベース入力に早期に集中できた。それでも対象となるPDFファイルは約1万5000点、10万ページを超えると推計され、大学図書館の限られた人員のみでは短期完了が難しかった。そこで市民ボランティアが週1回集まり、紙資料の読み取りと入力、データの整理を継続的に担っている。資料整理を大学図書館の内部作業に閉じず、市民と協働する姿を具体例として示せた点は、本展の重要な成果といえる。

【第2部：「膨張と忘却」に見る吉岡齊資料】

第2部は、吉岡氏が原子力政策の「現場」に深く関わりながら、研究者として何を見て、どのように考え続けたのかを、資料の具体的な手触りから追体験できるようにすることを目指した。

前半では、吉岡氏が物理学から科学史・科学技術論へ関心を広げていく過程を示す手帳、手稿、修士論文などを配置した。中学時代の抱負や高校時代に作成した冊子、「社会的責任の意識と現実」と題する修士論文は、科学者の責任をめぐる問いが早くから形成されていたことを伝える。続いて、科学社会学への関与や、戦後日本の科学技術を社会史として描く通史編纂の資料を通じて、科学技術を制度や価値観と結びつけて分析する方法が培われたことを示した。

後半では、原子力政策をめぐる資料を中心に構成した。高速増殖炉「もんじゅ」をめぐる懇談会の資料や任命書、電源三法交付金制度に関する報告メモ、原子力発電の経済性試算と情報公開請求に関わる資料、核燃料サイクル政策の費用や推進体制を論じた文書などは、政策がどのような前提と計算に支えられていたのかを具体的に浮かび上がらせる。また、余白への書き込みが残る資料では、会議の論点がどこに置かれ、どの点が争点になっていたのかを読み取ることができる。脱原発を目指した吉岡氏であるが、残された資料については、賛成・反対の立場を越え、原子力政策に関わる議論の構造を解きほぐすための材料として位置づけることを心がけた。

吉岡氏の関心は一貫して、科学が社会に与える力とその制御に向けられていた。2011年の東京電力福島第一原子力発電所事故を境に、吉岡氏は分析だけでなく、政策転換へ向けた社会的実践に踏み込んだ。自身が委員を務めた東京電力福島第一原子力発電所における事故調査・検証委員会の中継・最終報告書、震災後のエネルギー政策に関する備忘録や講演資料、座長を務めた原子力市民委員会の設立趣意書案などを通じて、研究者が公共的な議論にどう参加し得るのかを考える材料を提示した。

【第3部：九州大学での仕事】

第3部では、吉岡氏の研究が、大学での教育や組織運営と切り離されたものではなく、相互に影響し合っていたことを示した。教養学部構想の素案、1990年代の手帳、21世紀プログラム関連の講義資料、全学共通教育科目「科学史・科学技術論」等の配付資料、副学長としての辞令などを展示した。

吉岡氏にとって教育の場が、研究者の問題意識を社会に開く重要な回路であった点も見逃せない。授業資料からは、原子力政策にとどまらず、医療倫理や社会運動など幅広いテーマを扱い、学生の問いを引き出しながら議論を組み立てようとした姿勢がうかがえる。研究室やゼミの写真からは、研究が個人の作業であると同時に、対話と共同作業によって支えられていることを直感的に理解してもらえたかと思われる。

【吉岡斉科学技術史文庫コーナー】

このコーナーでは、箱崎サテライトの大学文書館にある「吉岡斉科学技術史文庫」内の様子を、実際の本棚の写真パネルで再現し、吉岡氏の蔵書に囲まれながら、吉岡氏の著作を紹介するものとした。ここでは、『テクノトピアをこえて』（社会評論社、1982）、『科学者は変わるか』（社会思想社、1984）、『科学社会学の構想』（リプロポート、1986）、『科学文明の暴走過程』（海鳴社、1991）、『原子力の社会史』（朝日新聞社、1999）、『脱原子力国家への道』（岩波書店、2012）などの著作や、戦後日本の科学技術と社会の関係を歴史的に描く通史編纂の成果を紹介した。

2. 来場者動向とアンケートから見える受け止め

会期中、会場内において記入式アンケートを行った。アンケートの回答は108件であった（な

お有効回答数は設問によって異なるが、以下では省略する）。所属は一般の方（学外者）63件（61.2%）が6割強を占め、九州大学教職員14件（13.6%）、他大学の学生・教職員13件（12.6%）、九州大学学生6件（5.8%）が続いた。年代は10代から70代以上まで幅広く、70代以上28件（26.4%）、50代24件（22.6%）が多かった。

満足度は「大変満足」55件（52.9%）、「満足」45件（43.3%）で、肯定的評価が96.2%を占めた。展示の分かりやすさは「わかりやすかった」80件（78.4%）が最多であった。

展示のボリュームは「ちょうどよかった」76件（73.8%）が中心である一方、「少なかった」22件（21.4%）も一定数あった。文章量の多い展示となった点は企画者としての懸念材料でもあったが、吉岡資料の圧倒的な魅力ゆえか、結果として満足度の高い「読ませる展示」として受け入れられたことは幸いであった。

九州大学大学文書館を「本展で初めて知った」は55件（55.0%）であり、展示会が保存・公開機関としての周知に寄与したことがうかがえる。資料整理ボランティアへの関心は「ぜひ参加してみたい」15件（16.1%）、「少し興味がある」63件（67.7%）で、両者を合わせると78件（83.9%）であった。なお「あまり関心はない」は15件（16.1%）であった。第1部で示した整理作業の可視化が、協力への具体的な想像を促したと思われる。来場のきっかけ（複数回答）は「知人・友人から聞いた」37件、「新聞・テレビなどの報道」26件、「ポスター・ちらし」21件が多く、報道や口コミが来場動機として大きな役割を果たしていた。

印象に残った展示（複数回答）は第2部74件、第1部57件、第3部47件、文庫コーナー26件であった。NHKのコーナーも12件が挙げられており、映像から資料展示への導入として一定の効果があったと考えられる。第2部が最多であったことは、吉岡氏や関係者の息づかいが見えるような、政策をめぐる議論の「現場資料」が持つ魅力に引き込まれたからであろう。また、第1部に関しては、資料の内容だけでなく、保存・整理・公開というアーカイブズ活動そのものが意外に多くの来場者の評価対象となった。

自由記述には、大学が資料を保存し公開する意義への評価が多く見られた。あわせて、原子力政策の意思決定過程が資料から鮮明に浮かび上がってくることへの驚きも書かれていた。今後の要望

としては、目録や概要情報の発信、週末開館の拡充、図録の作成などが挙げられた。こうした記述から、第1部で資料整理と公開に至る具体的なプロセスを示したことが、アーカイブズ活動への関心を高めたことがうかがえる。

おわりに

本展は、吉岡齊資料を紹介すると同時に、アーカイブズ資料が社会の共有財産になるまでの道のりを具体的に示した点に特色があった。第1部で整理作業を可視化し、市民ボランティアと大学が協働して目録作成を進める実態を示したことは、資料公開を支える基盤を来場者と共有するうえで効果的であったと考える。アンケートでは高い満足度が確認され、文書館を初めて知った回答が半数を超えたことは、保存と公開の役割を社会に伝える機会になったことを示す。ボランティアへの関心が一定数あったことは、協働の受け皿、すなわち募集や資料整理の研修、作業環境の確保等の整備が次の課題となる。

また、関心をどう次につなげるかも課題である。展覧会は資料の存在を知るきっかけをつくることには有効だが、その先にある利用（閲覧・引用・教育利用・研究利用）へつなぐ設計が伴って

初めて、アーカイブズの社会的価値が定着すると考える。今後は、目録公開後の利用方法を示す案内の整備、テーマ別の資料紹介、ボランティアの受け入れ手順と学習機会の整備、平日の利用ができないことへの対応や資料のオンライン公開など来館機会を補う対応策などを検討する必要がある。展示で得られた声を整理業務の改善に反映しつつ、資料の公開と利用支援を段階的に進めることが重要である。

資料を守り、活かす輪を広げることが、吉岡氏が問い続けた「科学と社会の関係」を次の世代が自ら考える基盤になると考えている。吉岡齊資料が将来的に多様な研究・教育・市民活動の基盤として活用されるよう、展示を契機に明らかになった課題を、具体的な運用改善へつなげていきたい。

末筆ながら、本展覧会の開催にあたってご協力いただいた関係各位およびスタッフに感謝申し上げます。NHK福岡放送局には番組紹介コーナーの設置を、九州大学附属図書館には関連企画展示をご協力いただいた。そして何より、毎週火曜日に吉岡資料の整理・目録作成を担ってくださっているボランティアの方々に、心より御礼申し上げます。皆様のご支援なくして本展の実現はなかった。

(九州大学大学文書館准教授)

九州大学大学文書館委員会名簿

委員長	理事・副学長	岩田 健治	委員	生医研教授	馬場 健史
委員	文書館教授	藤岡健太郎	〃	比文院准教授	和田 崇
〃	〃 准教授	赤司 友徳	〃	総理工院准教授	板倉 賢
〃	比文院教授	伊藤 幸司	〃	生物環境教授	吉田 敏
〃	法 院教授	熊野 直樹	〃	図書館館長	内田 誠一
〃	博物館教授	三島美佐子	〃	博物館館長	堀 賀貴
〃	韓 七教授	永島 広紀	〃	総務部部長	武井 久幸
〃	総務部総務課課長	佐竹 晃佳	〃	理学部等事務部長	山本 泰庸
〃	経 院准教授	村尾 徹士	〃	図書館事務部長	鈴木 雅子
〃	理 院准教授	新垣 誠司			
〃	芸工院准教授	増田 展大			

(2026年1月1日現在)

九州大学大学文書館名簿

館 長	理事・副学長	岩田 健治	兼任教員	比文院教授	伊藤 幸司
副館長	文書館教授	藤岡健太郎	〃	法 院教授	熊野 直樹
専任教員	〃 准教授	赤司 友徳	〃	博物館教授	三島美佐子

兼任教員 韓 七 教授 永島 広紀
 協力研究員 長崎大学名誉教授 柴多 一雄
 〃 九州大学名誉教授 柴田 篤
 〃 九州大学名誉教授 有馬 學
 〃 九州大学名誉教授 折田 悦郎
 〃 九州大学名誉教授 後小路雅弘
 〃 九州大学名誉教授 高野 信治
 〃 九州大学名誉教授 三輪 宗弘

協力研究員 元西日本新聞社 大西 直人
 〃 熊本学園大学商学部准教授 市原 猛志
 〃 清水建設株式会社技術研究所 松本 隆史
 総務課長（法人文書資料室長） 佐竹 晃佳
 事務職員 江藤まゆみ
 テクニカルスタッフ クウィーラ, ダーヴィト=ドミニク

(2026年1月1日現在)

大学文書館日誌抄録 (2025年1月～2025年12月)

- 1.6 (月) 専修大学理事、文書館見学のため来館。
- 1.7 (火) 西日本新聞社より資料調査のため来館。
 元九大生協職員一行、資料調査のため来館（14日、21日、28日、2月4日、18日、25日、3月4日、11日、18日、25日、4月8日、15日、22日、28日、5月13日、20日、27日、6月3日、10日、24日、7月1日、8日、15日、22日、29日、8月5日、19日、26日、9月2日、9日、16日、30日、10月7日、14日、21日、28日、11月4日、11日、18日、25日、12月2日、9日、16日、23日も同様）。
 地球社会統合科学府准教授、資料調査のため来館（14日、21日、28日、3月18日、21日、25日、4月7日、15日、22日、5月9日、13日、19日、27日、6月3日、25日、7月1日、29日、8月19日、26日、9月30日、10月7日、17日、21日も同様）。
- 1.8 (水) 九州大学文学部名誉教授、資料調査のため来館（23日、30日、2月6日、13日、14日、18日、20日、27日、3月6日、14日、4月25日、28日、5月1日、13日、15日、28日、6月2日、4日、19日、27日、7月3日、7日、11日、17日、22日、23日、30日、8月1日、7日、18日、21日、9月4日、5日、12日、18日、24日、10月2日、10日、16日、22日、24日、30日、11月6日、14日、20日、12月4日、18日、24日も同様）。
- 1.10 (金) 韓国研究センター教授、資料調査のため来館。
- 1.14 (火) 赤司友徳准教授、九州大学関西同窓会講演会にて「大学文書館所蔵資料から見る箱崎サテライトの歴史」を講演。
- 2.13 (木) 芸術工学研究院教員、ケルン大学教授・学生一行、文書館見学のため来館。
- 2.26 (水) 立教大学准教授、資料調査のため来館（28日まで）。
- 2.28 (金) 学務部学務企画課総務係、九州大学大学院比較社会文化研究院教授より資料寄贈。
- 3.10 (月) 岐阜大学大学院准教授、資料調査のため来館。
- 3.17 (月) 埼玉大学教授、資料調査のため来館（19日まで）。
- 3.25 (火) 江藤俊一氏より資料寄贈。
- 3.28 (金) 九大生協そしき部、資料調査のため来館。
- 3.31 (月) 『九州大学大学史料叢書』第31輯、『九州大学大学文書館ニュース』第48号刊行。
- 4.1 (火) 三輪宗弘名誉教授、協力研究員に就任。
- 4.9 (水) 「大学とは何かⅠ」（基幹教育科目）開講（藤岡健太郎教授・赤司准教授）。
- 4.10 (木) 「文書記録マネジメント論」（ライブラリーサイエンス専攻）開講（藤岡教授）。
- 4.15 (火) 「情報管理学概論」（人文情報連係学府）開講（藤岡教授）。
- 4.17 (木) 農学部等事務部学生課学生係へ資料提供。

- 4.23 (水) 人事部人事給与課人事係へ資料提供。
- 4.24 (木) 総務部総務課総務総括係へ資料貸出。
- 5.1 (木) 江藤まゆみ職域限定職員就任。
- 5.9 (金) 吉川幸作氏より資料寄贈。
- 5.14 (水) 藤岡教授、第186回Q-AOSブラウンバッグセミナーにて「九州帝国大学のアジア調査研究」を講演。
- 5.15 (木) 基金事業推進室へ資料提供。
- 5.17 (土) 赤司准教授、第12回医学歴史館「歴史のうねり」セミナーにて「戦時中の医学教育と軍医」を講演。
- 5.19 (月) 梅津政則氏より資料寄贈(12月3日も同様)。
- 5.21 (水) 藤岡教授、九州大学新規採用職員研修にて講義。
- 6.3 (火) 西日本新聞社より取材のため来館(7月31日も同様)。
- 6.5 (木) 九州大学大学院人文科学研究院専門研究員へ資料提供(6日も同様)。
- 6.11 (水) 「吉岡斉資料展 日本の科学技術と原子力政策」開催(於伊都キャンパス フジイギャラリー、主催：九州大学大学文書館、協力：九州大学附属図書館、NHK福岡放送局、6月11日～8月6日)。
- 6.12 (木) 韓国放送公社(KBS)より取材のため来館、同局へ資料提供。
- 6.16 (月) 北海道大学教授へ資料提供。
- 6.19 (木) 北海道大学大学院工学研究院助教、資料調査のため来館。
- 6.20 (金) 病院事務部総務課企画・広報係へ資料提供。
- 6.23 (月) 九州大学大学院工学研究院教授へ資料提供。
- 6.24 (火) 田川市石炭・歴史博物館へ資料貸出(「令和7年度 田川市石炭・歴史博物館山本作兵衛コレクション原画企画展 戦後80年特別企画展『戦争と、炭坑のマチ 田川』」にて展示、於田川市石炭・歴史博物館、第3期：7月1日～8月24日)。
- 6.30 (月) 倉林信博氏より資料寄贈。
- 7.2 (水) 総務部広報課広報係より資料寄贈。医学部眼科学教室へ資料提供。
- 7.22 (火) 芸術工学部事務部総務課企画・広報係より資料寄贈。
- 7.25 (金) 福岡女学院大学講師、資料調査のため来館(10月14日も同様)。
- 7.28 (月) 総務部総務課法人文書監理室へ資料貸出。
- 7.28 (月) 一般財団法人西日本文化協会へ資料提供。
- 7.29 (火) 人文社会科学系事務部総務課庶務第二係へ資料提供。
- 7.31 (木) 龍谷大学瀬田図書館へ資料提供(8月21日も同様)。
- 8.21 (木) 九州大学文学部名誉教授へ資料貸出、提供(「九州大学100年の中国学研究」にて展示、於伊都キャンパスフジイギャラリー、10月6日～11月28日)。
- 9.1 (月) 木永勝也氏より資料寄贈。明治神宮ミュージアムへ資料提供(「偉人たちの筆あと—明治神宮所蔵書の名品から—」にて展示、於明治神宮ミュージアム、10月18日～11月30日)。
- 9.4 (木) 独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所学術情報センター図書館情報課職員、文書館見学のため来館。
- 9.9 (火) 九州大学大学院人文科学研究院教授へ資料貸出(「九州大学100年の中国学研究」にて展示、於伊都キャンパス フジイギャラリー、10月6日～11月28日)。
- 9.11 (木) 武庫川女子大学講師、資料調査のため来館。
- 9.11 (木) 九州大学馬術部後援会へ資料提供。
- 9.19 (金) 後藤恒一氏より資料寄贈。
- 9.25 (木) 九州大学病院検査部より資料寄贈。
- 9.27 (土) 藤岡教授、令和7年度九州大学文学部同窓会座談会「学生街・箱崎と六本松をふりかえって」に登壇。
- 10.3 (金) 大学文書館委員会、書面回議にて開催(8日まで)。「文書記録サービス論」(ライブラリーサイエンス専攻)開講(藤岡教授)。「九州大学の歴史I」(基幹教育科目)開講(赤司准教授)。
- 10.7 (火) 「文書記録活動論」(ライブラリーサイエンス専攻)開講(赤司准教授)。

- | | | | |
|-----------|--|-----------|---|
| 10.17 (金) | 在京会津高校同窓会、資料見学のため来館。 | | 教務課学生支援係より電子ファイルにて事務文書移管。 |
| 10.21 (火) | 総合研究博物館専門研究員へ資料提供。 | 12. 5 (金) | 「九州大学の歴史Ⅱ」(基幹教育科目)開講(藤岡教授)。 |
| 11. 4 (火) | 大野克嗣氏より資料寄贈(10日、11日も同様)。 | 12. 6 (土) | 藤岡教授、第48回大学史研究セミナー・シンポジウム「大学沿革史と大学史研究:学問領域としての発展に向けて」にて「大学史と地域社会・国際社会-『九州大学百年史』からの展開」を講演。 |
| 11. 6 (木) | 柳川古文書館へ資料提供。 | | |
| 11.17 (月) | 松本隆史協力研究員、資料調査のため来館(18日も同様)。
同協力研究員へ資料提供(12月3日も同様)。
医学研究院精神病態医学教授室へ資料提供。 | 12. 8 (月) | 国際部国際企画課総務係、筑紫地区事務部財務課経理係より電子ファイルにて事務文書移管。 |
| 11.19 (水) | 一橋大学大学院准教授、資料調査のため来館。 | 12.16 (火) | 病院事務部医療管理課医療管理係より電子ファイルにて事務文書移管。 |
| 11.25 (火) | 江頭和彦名誉教授より資料寄贈。
総合研究博物館へ資料提供。 | 12.17 (水) | 施設部施設管理課工学系保全係より電子ファイルにて事務文書移管。 |
| 11.27 (木) | 情報システム部情報企画課より電子ファイルにて事務文書移管。 | 12.19 (金) | 病院事務部、医系学部等事務部総務課より事務文書移管。 |
| 12. 2 (火) | 施設部施設管理課農学系保全係より電子ファイルにて事務文書移管。 | 12.23 (火) | 筑紫地区事務部、芸術工学部事務部より事務文書移管。 |
| 12. 3 (水) | 農学部等事務部総務課研究協力係より電子ファイルにて事務文書移管。 | 12.24 (水) | 財務部資産活用課運用係より資料寄贈。
芸術工学部事務部総務課庶務係、附属図書館事務部eリソース課eリソース管理係より電子ファイルにて事務文書移管。 |
| 12. 4 (木) | 長崎大学大学院講師、資料調査のため来館。
医系学部等事務部総務課、工学部等事務部教務課統合新領域係、財務部財務企画課総務係、筑紫地区事務部 | | |

九州大学大学文書館ニュース 第49号

発行日 2026年3月31日

編集発行 九州大学大学文書館

〒812-8581

福岡市東区箱崎6-10-1 旧工学部本館1階

Tel:092-642-2292

Kyushu University Archives

印刷 株式会社ミドリ印刷
